



聖書を正しく

学びましょう

C.I. スコフィールド著

聖書を正しく

学びましょう

C. I. スコフィールド著

伝道出版社

目次

はしがき	四
ユダヤ人、異邦人、神の教会	七
七つの時代	二
二つの降臨	三元
二つの復活	四
五つの審判	五
律法と恵み	六
信者の二つの性質	八
信者の立場と状態	九
救いと報酬	一〇
信者と偽信者	一一

あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい。

テモテへの第2の手紙2章15節

RIGHTLY DIVIDING THE
WORD OF TRUTH

by

Dr. C. I. Scofield

はしがき

テモテへの第二の手紙の二章において、信者は七通りの人格で表現されている。すなわち一節では子と呼ばれ、三節では兵卒、五節では競技をする人、六節では農夫、十五節では働き人、二十一節では器、二十四節では僕と呼ばれている。

これらの人格のそれぞれに対して適切な勧めが与えられている。子としてテモテは恵みによって強くなりなさいと勧められている。ガラテヤ人への手紙を学ぶと、私たちは律法が僕の務めに伴うのとちょうど同様に、恵みが子の身分に伴うことを知るのである。次にテモテは兵卒として苦しみに耐え、日常生活の事に煩わされるなど勧められているが、これらは良い兵卒が当然持っているはずの性質である。また器として彼はきよめられ、僕として争わず、親切で、柔和でなければならぬと教えられている。このように、キリスト者としての彼の生活のこれら七つの性格にそれぞれふさわしい適切な勧めが与えられているのである。

十五節では働き人としての彼に次のように求められている。

「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神

に自分をささげるように努めなさい」。

したがって真理の言葉は正しく教えられなければならないし、真理の言葉の正しい分類の仕方を守らなければ、「恥じるところのない錬達した働き人」となることもできないのだから、この正しい分類を無視した**どんな種類の研究**もはなはだ無益であり、混乱したものになるということは明らかである。多くのキリスト者たちが聖書の研究は退屈だと公然と告白している。そんな告白は恥だと思うが、内心で退屈だと感じる人もそのほかにいる。

この小さい本の目的は、真理の言葉の分類の中で比較的重要なものを示すことにある。聖書の完全な分析をやるわけではないので、この目的が十分達せられないうらみはもちろん残るが、勤勉な読者が、真理の、比較的大きいアウトラインをつかみ、生れながらの人にとっては不調和でまた矛盾するいろいろの思想の単なる混乱でしかない神の言葉の、整然とした美と均斉とについて、何ものかを認識することができるためには十分であると信ずるのである。

読者はこの本自体をよりどころとしては、一つの教義といえども受け入れてはならないのであって、ペレヤのユダヤ人（使徒一七・11）のように果たしてそのとおりかどうかを知らうとして、日々聖書を調べることが切にお勧めするものである。人の権威に頼ること

は全然勧められない。「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまってい
るので、だれにも教えてもらう必要はない」(Iヨハネ二・27)。

ユダヤ人、異邦人、神の教会

主題聖句

「ユダヤ人にもギリシヤ人(異邦人)にも神の教会にも、つまりきになってはいけない」。

(Iコリント一〇・32)

注意深く聖書を読む人は誰でも、その内容の大半が一つの民族——イスラエル人に関するものであることを認めないわけにはいかない。また、イスラエル人が神のご処置とご計画とにおいて非常に特殊の地位を占めていることを認めるのである。イスラエル人は大多数の人類から区別されて、他のどんな民族にも与えられなかった特別の約束を彼らにお与えになったエホバと契約を結んでいるのである。旧約聖書の物語と預言に出て来るのはイスラエルの歴史だけであって、他の民族は、ただイスラエル人に接触するときのみ語られているに過ぎない。また、**民族としてのイスラエル**に対するエホバの交わりのすべては地上のことに関係があるように思われる。信仰深く従順であるならば、この民族は地上の偉大さと富と力とが約束され、不信仰で不従順であるならば「地のこのはてから、かのはてまでのもろもろの民のうち」に「散らされるのである(申命記二八・64)」。メシヤの約束さえも「地の

すべての「やから」に対する祝福に関するものである（創世記一二・3）。

読者がさらに研究を続けてゆくと、教会と呼ばれる、もう一つの異なった団体のことが聖書のうちに盛んに説かれていられるのを見る。この団体もまた神に対して特殊の関係をもち、イスラエルと同様に神から特別の約束をいただいているのである。ここまではよく似ているが、類似はここで終って、最も顕著な対比的な相違がここから始まる。すなわちイスラエルはアブラハムの血をうけた子孫だけで形成されているが、教会ではユダヤ人と異邦人の区別がなくなっている。単なる契約関係ではなく、新しい誕生の関係を、教会は神に対して持っている。服従すれば地上の偉大さと富の報酬がもたらされるのではなく、教会は衣食あれば足れりとするように教えられ、迫害と憎悪が向けられるかも知れないと教えられている。またイスラエルが明らかに仮の、地上的な事に関係した立場にあるように、教会は霊的、天上的な事に関係した立場にあることは明らかである。

さらに、聖書を調べれば、イスラエルも教会もいつの時代にも必ず存在していたわけではないことがわかる。おのおのその始まりが記録されている。イスラエルの始まりはアブラハムの召命にある。教会の始まりを調べてみる読者は、キリストのご在世以前はもちろん、ご在世中にさえ教会は存在しなかったことを知る。（これは一部の読者には驚きであるかも知れない。彼らはおそらく、アダムやユダヤ民族の祖先たちも教会の中に属すると教わっているだろうから。）なぜならイエス・キリスト

が、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」（マタイ一六・一八）と言われて、その教会については、なお未来のこととしてお語りになったのを見るからである。それは、「建っている」でも「建てつつある」でもなく「建てよう」である。

またエペソ人への手紙三章五〜十節でわかるとおり、教会のことは旧約聖書の預言には一度も説かれていない。旧約時代には「神のうちに隠された」奥義であったのである。聖書では教会の誕生は使徒行伝二章に、地上における教会の終りはテサロニケ人への第一の手紙の四章に示されている。

また、読者は、聖書が区別しているもう一つの民族に異邦人というのがあるのを見いだすであろう。これは稀に出て来るが、あらゆる点でイスラエルからも教会からも区別されているものである。ユダヤ人と異邦人と教会との地位の比較は、次の聖句の対照によって簡単に知られる。

ユダヤ人

ローマ九章四、五節
 ヨハネ四章二十二節
 ローマ三章一、二節

異邦人

エペソ二章十一、十二節
 エペソ四章十七、十八節
 マルコ七章二十七、二十八節

教会

エペソ一章二十二、二十三節
 エペソ五章二十九〜三十三節
 I ペテロ二章九節